

久保利英明の グローバル彷徨



第8回

リオ五輪とサントメ・プリンシペ

イラスト・題字：長峯亜里

私はこの夏、週に1便しかないリスボン発ガーナ経由のルートで、8月10日から17日までアフリカのサントメ・プリンシペ民主共和国(サントメ)に滞在した。世界最貧国の1つで、日本では誰も知らないと思われる国である。しかし私にとっては訪問167カ国目で、しかも世界の島嶼国48カ国(日本が国交を持つニウエ、クック諸島を含む)中、最後に残った貴重な国である。私はここをもって、全島嶼国を踏破したことになる。

五輪のブラジルと対照的な極貧国

この島の位置は大西洋沿いの国ガボンの沖合300kmで、ブラジルの反対側にある。世界の注目を浴び、喧噪渦巻くオリンピック開催中のブラジルと比較して、サントメには何も無い。街中にしゃれたレストランは1軒もなく、デパートも映画館も見つからなかった。この国の面積は964km²で東京都の半分もない。人口は19万人に過ぎず、いずれも世界最下位グループの国である。古来無人島であったが、1470年にポルトガル人が上陸、流刑地として使われた後、奴隷貿易の中継地としてアンゴラやコンゴ王国からブラジルに多くのアフリカ人を流出させた。

ポルトガルの植民地になった後、プランテーションでサトウキビやカカオ栽培が行われてきたが、独立後経済破綻に直面した。以後20年を超える政変の連続で、いまだに世界最貧国の1つか

ら抜け出せないでいる。

島の観光地としては、ピコ・デ・サントメと呼ばれる海拔2024メートルの垂直の岩壁が屹立する独峰(写真1)が有名だが、原生林の奥にあるので壮健な若者でも2~3日かかりで登山すると聞いてあきらめた。タク



(写真1) 垂直な岩壁の山
「ピコ・デ・サントメ」

シーで自然林の入り口まで近づいて写真撮影するにとどめた。

島の要塞であったサン・セバスチャン・フォートを修復したという唯一の博物館は、何度行っても閉館中で鍵がかかっていた。やっと4度目にポルトガルからの旅行者とともに入館できたが、展示品はマリア像あり、ウミガメの生態展示あり、プランテーションや奴隷の写真あり、土産物スペースありと不統一の極みで、売店の売り子らしき年配の女性が、部屋の鍵を開けポルトガル語で説明する。これでは観光立国は当分無理だろう。

目立つ外交・政治の立ち遅れ

町の中にポルトガル大使館と台湾の大使館、アンゴラの公館を見つけたが、日本大使館はおろか、アメリカ大使館も見当たらなかった。おそらくカリブ海の小国同様、中国とではなく台湾と国交を